



## 『<sup>じ</sup>慈 <sup>ひ</sup>悲』

正光寺の境内の真ん中にはわらべのような観音菩薩さまがいらっしゃいます。彫刻家野本喜石氏の作品です。とてもやわらかく温かみのある観音さまで、台座には観音さまらしく「慈悲」の二文字を書き、彫りあげてもらいました。なぜか自然と文字までやわらかくなった感じです。

ありがたいことにどの菩薩さまも「抜苦与楽（苦をやわらげ、楽を気づかせる）」をご誓願とされるのですが、その根本は他の喜びをともに喜び、他の悲しみをともに悲しむ慈悲の心なのでしょう。

江戸時代の良寛さんの逸話です。馬之助という甥（弟の息子）がならず者で、彼の更生のためにきつく叱ってくれと弟に頼まれ、しぶしぶ良寛さんは実家に帰りました。一週間ほども滞在したのですが、せがれを何とかしたいと願う弟の気持ちもよく分かるし、かと言って馬之助のやり場のない寂しさも理解でき、自身の中にもこの馬之助は存在すると心を痛み、叱る資格は自分にはないと帰り支度を始めました。やむを得ず弟は「良寛さんが帰るから草鞋のひもを結んで差し上げなさい。」と息子に言いました。馬之助が良寛さんの足元にうずくまってひもを結んでいると、首筋に冷たいものが落ちてきました。見上げると良寛さんが涙を浮かべて「おまえも辛かろうな。」と見つめてそっとささやきました。それだけだったのですが、それ以来馬之助は改心し、放蕩をやめたのだそうです。馬之助の言葉にならないうめきを心で観て取って救われた、観音さまの慈悲に似た良寛さまのお話でした。